

こちら特報部

「だけど私」

6

障害者の自立諦めない

「よく見て。点がない？」「あいアイ美術館」(埼玉県川越市)の理事長栗田千恵子(80)は取材に訪れた四月上旬、教え子の青木正臣(40)と樽井慎一郎(30)の目の前に本物のイカを置き、描いてもらっていた。

海をテーマにした夏の展覧会に出品予定だ。自閉症の青木と樽井は、返事をせず、会話も交わさない。ただ集中してフェルトペンを握り、黙々と描く。青木は紫色を基調に、樽井はペーシユやピンク、黄色の淡い

トーン。全く異なる個性の作品になっていく。

栗田はもう五十年以上、障害のある子に絵画を教えてきた。今は、あいアイ美術館のほか、東京都北区の就労支援施設や、練馬、港西区で講座を持ち、中学生から七十代まで、全部で四十六人の教え子がいる。

青木や樽井を含め、教え子五人は、全国に飲食店やホテルを展開する都内の企業に就職している。仕事は毎月二枚、企業から求められたテーマで、飲食店に飾る絵を納品すること。障害

あいアイ美術館理事長

栗田千恵子(80)



年金を加えると、月収は二十万円を超える。「収入があれば、家族が面倒をみやすくなる」と栗田は考える。あと十人は、就職させたいと考えている。

青木の母、和子(68)は「障害者が就労するってすごいこと。普通の施設に通っていいれば、お給料は三千元くらい。親が別に会費や送迎費を払わないといけない。ここでは給料をきちんともらい、個人の画材も買える。好きなことが見つかった本当に良かった」と話す。

アウトサイダーアートと呼ばれる障害者による絵画には、抽象画と比べられる作品が多いが、栗田はあえて題材を出し、写実を重視してきた。「たとえは

手を描くときは、『指はいくつ、指には筋があって、爪があるよね』と、よく見るように言う。言葉は通じないけど、形は分かるから」。だから教え子たちは、花を描くときはちぎって、花びらが何枚あるかまで確認するという。「自分の好きな絵だけ描いては社会とのコミュニケーションはない。企業からお金をもらうには、注文に応じて、ネギだつて虎だつて描かないといけないのだから。『見る』ことを覚えたら、全部できることになる」。講座に来た子に最初に描いてもらうのは、「O」「X」「△」。これだけを繰り返す。「ある女の子は△を描くのに七年かかった」と振り返る。二点を結び返ることがなかなかできなかったが、七年目で「すすすすと進んだ。できないということはないと分かった」。この基礎練習が大事で、「O」をパカにして一生懸命になれない子は、絵は向かないのかもしれない」と話す。

一月月に一回のペースで展覧会を開いてきた。時には二トトラックにイゼルを載せ、駐車場で移動展覧会も開催した。教え子が作品展で入賞するのもし珍しくない。絵が売れば、画家と美術館の収入になる。栗田は「絵を見てもらって『いいね』と言ってもらうと、確実に本人の絵も上達する。人とかかわりは大事」と話した。

絵画の指導を50年以上 創作で就職の教え子も

一九四二年、名古屋市熱田区にある熱田神宮の社家の一ツに生まれた。教師の父親からは書家になることを期待されたが、絵描きの道を選び、愛知教育大の美術科に進学。「広告のはしり」だったというグラフィックデザインをを目指した。大学に女子トイレのない時代だった。

絵の具を買うために、大学二年のときに始めたアルバイトは、小学一年の家庭教師。自閉症の女の子だった。いつも指をなめていて、こちらの目を見ることは決してない。「意思が通じないとつまらない」と思った栗田はある日、赤い風船に石ころの球を入れて持って行き、その子の目の前で針を刺して風船を割ってみせた。驚いたその子と、初めて目が合った。「意思を通じさせるにはびっくりさせればいんですよ」といたずらっぽく話す。

大学卒業後は東京都内のデザイン事務所に就職。山岳画家の邦明と結婚し、港区に独立事務所を構えた。カゴメケチャップのパッケージデザインや企画の仕事を受け、安定収入を得た。すぐに娘二人が生まれた。今の活動の原点ともいえる絵画教室「スーパートマト」を始めたのは、七〇年代。十年ほどたったころ、

「教えているようで教えられる」



①集中して絵を描く青木正臣さんと樽井慎一郎さん ②障害者による絵画作品を鑑賞する人たち=いずれも4月8日、埼玉県川越市で

大きな出会いがあった。ある小学生の男の子とその母親だ。「その子は手が出ることもあって大変だったが、絵が抜群にうまかった」と栗田。本格的に障害のある子と創作活動を始めるときに近づいた。

障害のある子の母親たちと勉強会を重ね、二〇〇二年には、NPO法人「あいアイ」を設立。創造活動の成果を障害者の自立の一助とするのを、明確な目標とした。障害者自立支援法制定より前のことだ。

一〇年に中国で開かれた上海万博では、教え子たちの作品百点近くを出品。一日々ばかりではなかった。

日十一万人が会場入りし、大成功を収めた。中国とのかわりには、四十年ほど前、東京都の高校生約四百人が北京市などを訪問する「洋上セミナー」に、障害者の担当として参加したのがきっかけ。中国の障害のある子どもたちとも創作活動をしてきた。

栗田も画家として展覧会を開いているが、教え子の影響を受けてきたという。「私は教えているようで教えてもらっている方が多い。私には見えないピンクが彼らには見える。本当にすごい」。ただ、穏やかな日々ばかりではなかった。

「受け入れることが大事」

教え子がかんしゃくを起し、トイレの壁に穴を開けたこともあった。

夫の邦明が四月上旬、八十二歳で他界した。栗田は若いころの邦明の写真と、「自分の遺影に」と描いた自画像を見せてくれた。ひげを生やし、彫りの深い外国人のような顔。髪とひげがオレンジ色、瞳は青で彩られていた。「とにかく駄目な人でね。働かないけどお金は大好きで、山ばかりやっていた」。絵のスポンサーが見つかったも、大げんかして帰ってくる。家計を支えたのは栗田だった。「自立はずっと、私自身の

テーマでもあった」栗田にとっての理想は、「彼ら(教え子たち)がごくあたりまえに暮らせるようになること」と話す。活動を支える芸術大の学生は、障害の有無など無関係に接している。でも社会全体でいえば「差別はまだ残っている」と感じる。「親たちは大変で、社会がもっと協力していかないとけない。受け入れることが一番大事で、否定からは何も始まらない。少しずつ壁を破っていくしかない」。月曜から日曜まで、祝日以外は休まず、講座を飛び回る日々を過ごしている。教え子の作品はファイルに整理し、丁寧に説明を添えて美術館に保管する。「私の遺書。誰かが希望するなら、これを見て続けたい」と思っている。

(大杉はるか、文中敬称略)

バイトきっかけにかかわり



「メンタラ」

経済的に自立するのは、今の低賃金社会ではなかなか難しくなっている。障害者ならなおさらだろう。一方で、障害者が自立して生活できる社会こそが、多くの人にとって暮らしやすいに違いない。栗田さんのような活動は、その社会の実現に向けたヒントになるのではないか。(六)